

# 連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版 B6判  
三五二頁  
三五〇〇円

連句の実作・鑑賞・研究に  
必須の知識をすべて網羅！  
初心者から研究者まで使え  
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三三四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

### 収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越  
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字  
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木  
〈人名篇〉 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋  
鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山  
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

## 水原秋桜子編 二三〇〇円 俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇句を収め、豊かな実作の経歴を生かし句作にも役立つ

## 水原秋桜子編 二八〇〇円 現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

## 大後美保編 二八〇〇円 季語辞典

日本の季節によつた言葉やスモツグ・不快指数などを収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

## 中村俊定監修 四五〇〇円 難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す



# 連句 第45号 季刊

国語学大辞典 国語学全編  
B5 一六〇〇〇円

国語慣用句大辞典 白石大三編  
A5 八〇〇〇円

国語慣用句辞典 白石大三編  
B6 二二〇〇円

国語史辞典 林巨樹他編  
B6 二五〇〇円

日本語語源辞典 堀井幸以他編  
B6 一八〇〇円

京都語辞典 井之口・堀井編  
B6 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 榎垣・実美編  
B6 二二〇〇円

隠語辞典 榎垣・実美編  
B6 二二〇〇円

近世上方語辞典 前田 勇編  
A5 一〇〇〇円

花柳風俗語辞典 榎垣・実美他編  
B6 二二〇〇円

明治新語俗語辞典 榎垣・実美他編  
B6 二二〇〇円

難訓辞典 中山 善雄編  
B5 二二〇〇円

名乗辞典 栗本 貞道編  
B5 二二〇〇円

名数数詞辞典 森 妙彦編  
B6 四五〇〇円

あいさつ語辞典 奥山 益樹編  
B6 二八〇〇円

新版ことば遊び辞典 鈴木 三郎編  
B6 五八〇〇円

類語辞典 鈴木・広田編  
B6 二八〇〇円

類義語辞典 徳川・高島編  
B6 二二〇〇円

表現類語辞典 藤原 幸一他編  
B6 四八〇〇円

新版文章表現辞典 神樂・村松編  
B6 二六〇〇円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7 電話03-3233-3741-2

連句との三十年 (南柏雑記 43) .....	1
歌仙「花の盛り」 .....	2
A. C. Cの連句実作を受持って .....	4
A. C. C講義の一年 .....	6
「灰汁桶の」の巻鑑賞 (VI) .....	8
亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行 第四十九回 猫蓑会 .....	11
第一部 正式俳諧興行 (一)役割 (二)次第	
二十韻「梅の若枝」 捌・文 中川 哲	
第二部 二十韻 十二巻	
文 執筆の役を終えて.....	仏淵健悟
「馬追」付勝練習二十韻 .....	東 明雅 ... 20
百韻「麗かや」 .....	捌 坂本 孝子 ... 22
源心一卷 歌仙二巻 .....	捌 東 明雅・秋元 正江 ... 24
	坂本 孝子・式田 和子 両吟
明雅先生の中寿をお祝いして .....	秋元 正江 ... 26
「芦丈翁俳諧聞書」編集奮闘記 .....	登坂かりん ... 28
雁帛往来・終刊の辞 .....	29

表紙 (翡翠) 宮崎龍火子

# 連句との三十年

南柏雑記 43

雅

昭和三十六年(一九六一)に、はじめて根津芦丈先生にお目にかかり、連句を教えていたから、私は外の一徹をなげうって、これに没頭した。それから三十余年の生涯は連句とともに生きて来たようなものである。

今、振り返ってみると、昭和五十五年(一九八〇)までの二十二年間は、信大連句会を作って、芦丈先生の指導を仰ぎ、一所懸命で連句を勉強していた時代である。その様子は、「芦丈翁俳諧聞書」に書いた通りであるが、最初から最高の先生に巡りあえたのは最大の幸せであった。先生は四十三年(一九六八)には歿されたが、その後は、瓢左先生や牛耳先生にもおつきあい頂き、自分でも満足のゆく作品が捌けるようになった。それは当時の信大連句会のすばらしい連衆の力によるものと感謝している。四十七年(一九七二)の「夏の日」を読み返すと、皆で連句を楽しんでいた様子が偲ばれて懐かしい。

昭和五十五年、信州大学を停年退職した私は、東京に出て、翌五十六年(一九八一)、朝日カルチャー・センターの講師となり、連句を教えることとなった。受講生の方は皆熱心であり、また、優秀な方が多かったので、時ならずして、信大連句会にも劣らぬ連衆が出来上り、それらの方を

中心に猫蓑会が結成され、今年で十四年目に入っている。連句は昭和四十五年(一九七〇)ごろから文壇に復活したと言われている。昭和五十年ごろから入門書が輩出し、方々に会が出来て連句を楽しむ人が増え、急に賑やかになった。そして、遂にはそれらの人を集めて五十六年(一九八一)には「連句懇話会」が、まず作られ、六十三年(一九八八)には「連句協会」が結成された。

これは一面においては嬉しいことであったが、ひとつ困ったことがあった。それは「連句協会」の会長はじめ会員の多くの方が、私の連句とは全く異った連句を作っておられたことであつた。私は連句というものは、付けと転じが最も大切だと芦丈先生から習い、それを今でも守っている。しかし、「連句協会」ではそれらはあまり問題にされず、例の自・他・場の区別も無視しておられた。

私は連句懇話会の時もすすめられて入会し、連句協会で顧問になつてゐる。しかし、私はどうしても納得が行かないので、連句協会とは疎縁だったし、また、昭和五十八年(一九八三)からは「季刊連句」を発行して、自説を主張し、そのためには他派の人の作品を批判した文章も書いて来たのである。

こんなことをやっている間に、停年から十四年が夢の間を経て、気がつくくと、私はいつの間にか教えて八十の翁になつてしまった。もう十分である。これからは、人を教えたり、批判したりしないで、のんびりと相手になつて下さる方は誰とでも連句を楽しみたいと思つてゐる。

歌仙 花の盛り 捌 上月淳子

評 東 明雅

仰ぎ見る花の盛りの一會かな  
 弥生の空の淡き二藍  
 団扇張る路地に物煮く匂ひして  
 ブリーダーより届く若犬  
 夕月に人無きメリーゴランド  
 そぞろに寒き己が靴音  
 葡萄酒を醸す男の髭の濃き  
 くすぐったいの初めてのキス  
 ぶかぶかの彼のパジャマがよく似合ひ  
 寝台特急闇を裂きゆく  
 大深度地下の工事も幾年か  
 玉鹽出て来て議論沸騰  
 懐手仏頂面の隠居殿  
 月光はじく鷹の瘦身  
 決闘の立会人もきめられて  
 のぞく模擬店幔幕のかけ  
 金賞を得たる盆栽梅古木  
 墓穴を出て眠き半眼

淳子 一惠 瑞枝 元子 水壺 遊 元 惠 遊 元 枝 壺 遊 枝 元 淳

発句と脇は神代植物園の花見の句、花盛りに遭うよろこびと感懐がこめられている。脇は打添付の典型。二藍は辞書によればやや赤みのある藍色。春の空のどこか艶のある色である。

第三 発句・脇の優雅さに対して俗なものを取り上げた。「団扇張る路地に」は、厳密に言えば句跨りであるが、「仰ぎ見る」と「団扇張る」は同型であるから、「団扇張り」とすれば、同型も句跨りも免れる。

四句目 ブリーダーは犬や猫を繁殖させる人。すでに日本語化している。軽い句で結構。

五句目 場の句、ブリーダーとメリーゴランドは何か付味がよい。

折端 前句の「人無き」の寂しさを受けて、その気分に応じ深めている。打越からは一転。

ウラ折立 前句の自に對して他の句の向付。

髻男の登場は恋句の誘い。この辺りの配慮も十分である。八句目 「くすぐったいの」が前句の「髭の濃き」に呼応して、軽いユーモアもあり、裏の恋句としては上々である。

子遍路のかかとを踏んでスニーカー  
 レゴ積み重ね小さき夢みし  
 これやまた下世話に馴れて冷奴  
 遠山脈を望む山荘  
 縁談の何故か途中で立ち消えに  
 何食はぬ顔ニューハーフとは  
 荒馬を御しそこねたる医者通ひ  
 追っても追っても迫る雪鬼  
 北風辻音楽師伴みて  
 芥浮べつ川は流れる  
 アルジュリアカスバの塔に昇る月  
 水煙草のむ秋のうららに  
 ひとり居にちんと打ちたる鉦叩  
 来世紀まであと二千日  
 松江なる八雲の旧居の人の影  
 お客様には薄茶差し上ぐ  
 舞ひ舞ひて天に還るか花の精  
 軽くはづんで春の小霰  
 平成六年四月七日 首尾  
 於 神代植物園

枝 遊 壺 元 枝 遊 元 惠 遊 元 枝 壺 遊 枝 元 淳

十句目 前句のパジャマから恋の情を取り去って寝台車への見立替も鮮か。

十二句から十八句まで、ことに十三・十四・十五・十六・十七・十八の一連は、これを正に武蔵と小次郎ではないが一句一句、丁々発止で渡り合っている。連句のおもしろみはこんなところにあるのである。

ナオに入って、二十三・二十四・二十五・二十六、このあたりも連衆と捌きの格闘が見られおもしろい。ちょうど十九・二十・二十一・二十二あたりまでがややおとなしく、平凡であり、ウラのもり上りも一応静まっているので場所としても適当である。ただ、ウラの十三から十八までと比べると、完成度は劣っており、ことに二十四と二十五はどういう意味なのか付心も意味もはっきりしない。

二十六は「冬の旅」に出て来る魔王の面影であろうか。

二十七・二十八・二十九・三十はまた穏かになったが、二十七の辻音楽師、二十九のカスバ、三十の水煙草と異国めいたものが三・四句続くのが気になる。また十九が「昇る月」と夜の景であるのに、三十の付句が「秋のうららに」といかに白昼を思わせる景を付けたのは付味が悪い。

ナウ 三十一せっかくの場所であるから、もすこし述懐の気分が出てよいのではなからうか。

挙句 春の小霰は珍らしいものを出したが、花の句がいかに和氣霽々の春景色なのに霰はちよっといかが、あるいは「春の小雀」位ではいかがであろう。

# A・C・Cの連句実作を受持って 秋元正江

## 連句実作

A・C・C教室の連句実作を受持って六年目に入り、先ず人数がふえたこと、土曜日になったので若い人や男性が入ってきて教室は活発で自由な雰囲気溢れた。

二十韻「花踏んで」の巻は明雅先生に発句を頂いて一回の講義に一句の割でじっくりと進めた。常に即吟を心がけとあるが、一句を作るのに使える時間は約十分、出来た人から集めた短冊を明雅先生と共に板書。多彩な付句が黒板所狭しと並び、その中から席の順に最初は気に入った付句（数句でもよい）を選んでもらう。つまり荒選である。そこで付句に意見がある時はここで討議し、もう一度見直し自分が捌きになったつもりで四十句余りから一句を選び、挙手でその集計をとる。これは句会なら互選の形式だ。ひとつの前句に対して、他の人がどのような付句をするかそれを何人が共鳴するかが一覽できるのだ。

この忙しい現代に、一瞬の脳細胞への刺戟を与える作業は貴重なひとときだと思ふ。また一句を選ぶことは、作るこ

とにましてむずかしい。前句との付味、打越との転じ、一巻の流れをみなければならず、一句としてはどんなによくても、とることが出来ない。

教室は発足以来十四年目に入るのだから、年期の入った方もいる。年数の違う人が一堂に巻くのは大変だと思われるかも知れないが、よくしたもので連句という座の文学は、式目が未だの新しい人は新鮮な発想、ベテランは新人をひっぱって二十韻の妙を奏でている。

一巻の中で通句という七名八体のひとつを使って新たな展開へ向かう句を入れてくれるのだ。バイク疾走山峡の道や、くるくる回る団栗の独楽、などはそれ迄の人情句のねばりをうまくかわしてくれたと思ふ。

## 発句の作り方

連句会に出かけるときは、実際はいらなくても嗜みとして発句を用意するように心掛けましょう。

次に会場には時間ぎりぎりにすべりこんだり遅刻をしないこと、早目に着いて周辺の自然に触れるゆとりが欲しいのです。

着く迄の気象、季語に心を深めて、柔軟でみずみずしい感性を保つことが必要で、その心のためたいを切りとって発句に仕立てます。発句は挨拶だからといって、季語、切字を入れて事柄を説明しただけの安易な句にまとめないように気を付けましょう。花を詠んでも風を詠んでも自分という人間の表現です。

## 二十韻 花踏んで 正江捌

花踏んで年々歳々惚けにけり

日つむりて聴く梢の囀

新作の春の装ひ揃ふらん

カフェオーレをふたつ注文

川開き月読男一座して

金魚と呼ぶる仇な姐さん

真っ白に塗り潰されし塾の壁

並の人でも大臣の夢

琵琶とりて平家滅亡語るなり

バイク疾走山峡の道

切株にひよんな顔してまみだぬき

ふるさと思ひ湯ざめごこちに

ブラジルも日本も祖国と片言で

酒場横町抱いてやる月

預けたる嬰に乳張って秋深み

くるくる回る団栗の独楽

明雅

清子

健悟

和子

あかり

文子

良子

良弥

豊美

庸子

よしえ

央子

蓉子

達子

麻子

弘子

掘り出され在りしままなる兵馬備

見上げる空に雲がゆっくり

桃桜いま満開と便りせん

茶碗に盛れる菜飯つややか

平成五年四月十日 起首

平成六年三月二十六日 満尾

於 東京朝日カルチャー四十八階教室

澄子

正秋

淑代

久美子

※教室で席題の選をするに当って、俳句として選ぶのか、発句として選ぶのかという質問がありました。それは勿論発句の条件をみたすものを選んで欲しいということに違いはありませんが、敢えて俳句としての芸術性にすぐれている句はそれを捨てるべきではないと思ひます。佳句を鑑賞することも実作の力をつけますし、その句のセンス、作り方を学ぶチャンスは失ってはならないのです。

発句は歌仙なら三十五句を引っぱっていく巻頭の句であり、発句と俳句は元は同じで俳句の作り方を知る必要があります。完全に独立して脇が付けれられない俳句（つまり発句として成立しない）は、それを見分けるべきですが、逆に発句の条件をかたくなに狭い範囲にしてしまうと、発句は新しいものないありきたりのものになってしまう。

発句の在り方を踏まえた上で、ことばは、曖昧なはつきりとした粹のない所に美があるのです。かわたれどきのような昼でも夜でもない天地の言霊が入れ替る一瞬のあわいを見つけ、歳時記と好きな句集を読んで下さい。

# A・C・C 講義の一年 式田和子

「人の親、恋に容赦のなきことや」(室生屋星)

平成五年の四月から、朝日カルチャーセンターの連句教室のお手伝いをさせて頂けるようになりました。

このお話を承ったときは、とても私には荷の重いお話です。とご辞退申上りました。それと申しますのは、私は入門以来十二年余りになります。私のときは一年ずつでございましたが、途中から半期春秋の入門となり、新しい方が年二回お入りになるようになりました。合計して数えますと、明雅先生は、連句のお講義を二十回以上も遊ばしていらっしやるわけになります。ただの一回も同じお講義はなさいませんでした。同じ「脇」でも「花」でも、あれこれと切り口を変えてお話をなさいます。そのご学識の深さ、広さは驚異と申上げては失礼ですが、驚くばかりでございました。それから、とても私など……と、もう恐ろしくて仕方がありませんでした。

そこで、話は冒頭の室生屋星に戻りますが、これは、人

用語が飛び交いました。他のお稽古事をしておりましても、その世界特有の言葉がありまして、それが自然に口に出せるようになれば、先ず一步は踏み出しているものだ、ということは身に沁みておりますので、ペテランの方々にはお目だるいこととは思いますが、用語の解説を別に機械的にくくって扱ってみました。また、実作には、組立て方なども、初めに頭の中に入れておいて、その枠を知ってから出句をなされれば、「これはもうナウだから採れないわ」などと捌きに云われることもなく、新人の方でも句を採用される率が高くなります。そうなりますと、ますます連句が面白くなるのではないかと、という考え方から、「一巻の作りの考え方」などとして取り上げてみました。

なにしろ私は浅学非才ですから、明雅先生のお講義のノートを読み返し読み返し、当日用の原稿をまとめておきますと、いかに自分が良い加減にお講義を伺っていたかを痛切に反省させられます。どうしてもっとしっかり一言一句のがさず伺っておかなかったのでしょうか……。悔やんでも仕方がありませんので、また力をふるい起こしてワープロに向うのですが、そういうときに限ってワープロまでがそっぽをむいて、ヘンな文字転換をしてくれたり……。エエ、天は我に組せずか——などと古人の口真似をして嘆いてみたりの日々でした。

しかし、これによって、連句を最初から勉強し直すチャンスをお与え下さいました明雅先生に深い感謝を捧げるも

の親は自分の若いときの事は忘れてしまつて、若い人の恋には容赦がない、ということ、人は兎角前のことを忘れるが、思い出してはどうか——ということ、そこで私も、入門したとき、何が一番のネックだったか、そこを征服したら、山の登り口が見えてまた前へ進めるのではないかと考えました。私と一緒に入門された超々ペテランから連句は知らないが面白そうだと入門された新しい方々とご一緒のお教室での勉強ですが、連句でつまづく石は何かを探り探りいくより仕方がない……。と、開き直つて、実は内心ブルブルしながらの講義となりました。

お教室では正江先生が、続けて実作をなさいますので、先にする私の講義がすぐ続いている実作に役に立つようになくは意味がありませんから、一句一句の進み方で次の講義内容を考えていくわけですが、脇・第三・四句目・月・花・恋のような決った演目のない平句続きのところへはこういう考え方のものを挟み込もうと考えました。

私が入門した頃、きょとんと坐つておりました、目の前を「打越し」とか「一直」とか「折端だから」とかの連句のでございます。それにしても連句は難しうございますね。いわゆる式日は暗記しても——しなくても、永年やっていれば自然に身につくものと思いますが、七名八体の付心の分類、実例。手引書通りに考えればそれなりに納得がいきますが、現在のように、単語に横文字も入り、言葉そのものも新しくなつて来ますと、前句の句の味を読み取るのも時には考えてしまうこともあります。七名のほうにはくくられても、八体でどう分類したらテキストとして使えるかなどは、これからの私の宿題となりましょう。やはり、今の作品を併列して使わないと、若い方は少し異和感を持たれるかもしれません。連句そのもののメカニズムは、ちつとも古くなく、世界に誇る文芸として十分機能するものと思えますから、この辺りをもう一度私は学び直さねばと思つております。

また、出て来る字の難かしさ。それが読めない書けない自分の不甲斐なさなど、いやというほど知らされた一年でございました。

お教室の皆様が、はたしてお分りいただけただかどうか、という不安も一年間ついでまわりました。ただ、私も入門して長い間、分つたと思つていたことが本当は分つていなかったことがやつと分るこの頃ですので、どうかお気を長くお持ち下さつて、ご一緒に勉強してまいりましょう。

いつも明雅先生がついて下さいますから、頼りない船頭でございますが、大船に乗つたお気持ちでいらっしやるよう、今後ともどうぞよろしくお願い申上ります。

# 「灰汁桶の」の巻鑑賞 (VI)

東 明 雅

柴さす家のむねをからげる

冬空のあれに成たる北風

去来 凡兆

(現代語訳) 北山から吹きおろす風が烈しくて冬空は荒れ模様になって来た。それで柴でさしかためた棟をすっかり結んで、冬構えをしている。

(付心) 屋根の修繕を北風の荒れに備える為とした。心付。天象の付け。前句の「むねをからげる」の語氣に、あわただしい俄か繕ろいの様子が連想されるから、暴風の趣きを付けたが、それも冬空であるだけに、一層きびしい気分が募る。

(転じ) 打越の惜春の情が一転して、冬のきびしい気分となつてゐる。

(補説) さきに、

鶯の音にだびら雪降る

乗出して眩に餘る春の駒

凡兆 去来 野水

の付合を説明した時、これは三句がらみで全く転じがないと評した。

かへるやら山陰伝ふ四十から

柴さす家のむねをからげる

野水 去来 凡兆

この付合も中に人情の句を、人情なし(場)の句で挿入している点は、前の例に同じであるが、打越・前句が余裕ある人の春愁・惜春の情であるのに対して、前句・付句の場合には、前句を春祭りの頭の家から、冬に備えて俄か繕ろいをしなければならぬ家へと見立替して付けた為に、同じ人情なしの句でも、変化・転じが効いているのである。

冬空のあれに成たる北風

旅の馳走に有明しをく

凡兆 芭蕉

(現代語訳) 冬空が荒れ模様になり北風が烈しいので、旅人のせめてのもてなしに、主人は一晚中、灯をともししておいてくれた。

(付心) 前句空模様を述べた場の句から人情の句を付けて来る起情の句。三冊子に「馳走の字さびあり。荒れになりたると心のしをりに、旅亭のさびを付けて寄するなり」と

ある。旅の空が荒れ模様になって心配する旅人のわびしさ・あわれがひびいて、旅亭のわびしさ・あわれとしての馳走(一晚中、灯を点してサービスするだけしか出来ない)で相応じているのである。もともと「馳走」という言葉にはさびというものはないのであるが、前句に応じたその内容(食事や寝具で十分歓待できず、せめて夜中、点燈することによってサービスするという貧しさ)に、新しいわびしさとあわれが見られるというわけである。

(転じ) 打越は屋外の作業で目の句であるのに、この付句は室内で自他半の句。

(補説) 「有明しをく」有明しは一晚中通してつけておく燈火の總称で、枕頭にもす「有明行燈」や、台所に吊つて用いる「八間」なども、終夜つけ通す時は「有明し」という。ここは現在の電気スタンドにあたる「有明行燈」であらう。江戸時代は燈油が高かった(この巻脇句「あぶらかすりて宵寝する秋」参照)ので、安宿では「ありあけ代」と言つて、有明行燈にともす燈油代を請求することもあった。

ただ、樋口功・折口信夫・伊藤正雄などの諸氏が説いておられるように、「旅亭と見るよりも荒れに降りこめられし民家にも一夜を頼みし趣と見る方、余情深かるべし……」この宿を旅宿と見ないで、普通の家とする方が余情が深いように思う。

この句のすばらしさを説いた先人の二つの説を紹介する。旅といふ一字で、前句の荒寥の世界を一転して、風味の世界とした技倆も非凡であるのに、「馳走」と曲に出て、

前句の題材を一括に手際よく旅宿の風情の中のものとした心ばせは、殆んど神逸の技と云つてよいやうに思ふ(太田水穂「芭蕉連句の根本解説」)

此句は動後の静を描いてゐる。「冬空のあれに成たる北風」といふ動中の動を受けて、下手な人が付ければ、ここで前句の烈しいあぶりを受け、動の句を出すと思ふ。その結果がよくゆくかどうかはわからないが、それを芭蕉は、静の句で受けとめてしまったのは、さすがに非常な手腕を思はせます。しかもその静の句は、いきなり食ひ止めるのでなく、そろそろと緩和しながらここで押へてゐる。「旅の」ではまだ動いてゐるのですが、「有明しをく」で夜更け万物静かになつた落着いた氣持が出て来ます。実に美事な付方です。(山田孝雄、芭蕉俳諧研究)

旅の馳走に有明しをく

すさまじき女の智恵もはかなくて

芭蕉 去来

(現代語訳) 旅亭の女が旅のもてなしとして有明しを置いてやり、男を待たせたが、その女の智恵もむなし、興ざめた結果となつた。

(付心) 其人の付け。これは旅籠屋女、出女あるいは飯盛女と呼ばれる者たちの恋の手管を詠んだものである。

(転じ) 前句の旅のもてなしをきつかけに、恋句に転じた。(補説) 「すさまじ」はもとしらじらとした不快感・興ざめの感じで、季節感はなかつたのであるが、鎌倉時代の頃から寒さ、冷の感じをもつ事になつた。「花花草」は八月、

「毛吹草」は冷・暮秋としている。「御傘」には「すぎき心の句も秋に用べし」とある。この句の典故としては「徒然草」一〇七段の次の文章があげられている。「ふかくたばかりかざれる事は、男の智慧にもまさりたるかとおもへば、その事、跡よりあらはるゝを知らず。すなほならずしてつたなきものは女なり。……もし賢女あらば、それもものうとく、すさまじかりなん」。さらに「枕草子」二五段の「すさ

まじきもの」の段も、かなりポピュラーで、人口に膾炙されてきているため、何かこの語には古典的なイメージがまわりつき、たかが、飯盛女の恋の駆引きを叙する言葉としては、ややオーバーな感じがする。また、すさまじき・はかなくてと、抽象的表現のみに終始しているため、この女性の実像がちっとも読者の脳裡に浮かび上がって来ない。

教室での発句習作 (五頁の続き)

正江選

発句 席題

花冷え・籐椅子・熱帯魚・炎天・新宿・その他

春

あやにやしをとこをみなも花の冷え  
鳴り出でしからくり時計花の冷え

央子  
恵美子

秋

残る蠅新宿警察検問中  
障子張る我ら新宿三世代  
父呼びし内藤新宿望の月  
別々に生きし三十年ぬくめ酒  
ひとり酒奔流となる虫のこゑ  
秋晴れに酒気残るかな鬼瓦  
火祭や巫子の捧げる新走り

豊美  
あかり  
弘子  
央子  
政治  
シズ

夏

井売って籐椅子ひとつ引取れり  
市役所の大きな窓や熱帯魚  
脇道の古書肆の棚や熱帯魚  
さくらんぼ少女ら椅子を引寄せて  
友来り白める朝のさくらんぼ  
炎天や坂また坂の切絵集  
炎天やひよろりと出でし街静か  
炎天や指二つ折る用の数

徒司  
清子  
娟  
守英  
豊美  
紀子  
あかり

冬

短口の実朝の海波すさぶ  
雪婆疊の波をわたりけり  
嫁ぎゆく姉は泣かずよ雪兎  
チュホフの女なくなり冬薔薇  
大寒に北の習ひの素肌かな  
冬の虹つぎのひとこと待たれをり

光子  
淑代  
健悟  
達子  
失名子  
清子

# 亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第四十九回 猫蓑会

第四十九回猫蓑会は四月二十四日(日)、江東区亀戸天神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行奉納し、そのあと二十韻十二巻を首尾した。今年は特に賓客として、小林しげと・中尾青宵・名古屋子・宮下太郎の各先生をお招きし、出席者六十五名の盛会であった。

第一部 正式俳諧興行 夢想披き俳諧「梅の若枝」  
第二部 二十韻十二巻

(一) 役割

宗匠 中川 哲  
脇宗匠 豊田 好敏  
副宗匠 今宮 水壺  
執筆 佛淵 健悟  
知司 権頭 和弥  
副知司 佐藤 良弥  
座配 峯田 政志  
花司 秋元 和彦  
配司 中川 良輔  
同 北村 良輔  
老長 杉江 杉亭

(二) 次第

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆登場
- 六 文台捌き
- 七 知司挨拶
- 八 俳諧興行
- 九 花前
- 十 玉串奉典
- 十一 花の句披露
- 十二 端作り
- 十三 吟声
- 十四 文台返し
- 十五 作品奉納
- 十六 知司挨拶
- 十七 退席

夢想披き俳諧

二十韻 梅の若枝

捌・文中川哲

かふたちてさかふる梅の若枝哉  
 百千鳥鳴く園のひろびろ  
 盛りつけん鯛の浜焼大皿に  
 児らから貰ふ折紙の舟  
 夕立に山洗はれて月昇る  
 浴衣の君の白き襟足  
 残り香をそのまま歩く長廊下  
 患者も選ぶ好きな先生  
 傷つきし犬が宿舎の前にをり  
 コーラン唱へ伏せる凍土  
 寒昂仰ぐ宰相明日知らず  
 人口よりも多き拳銃  
 ジ・エンドのシェーンカムバック耳にあり  
 後添へのきて熟れる秋茄子  
 月光を頼みてしのお閨の内  
 したみ酒する麴のどびろく  
 七十は稀にあらざとクラブ持ち  
 携帯電話なほもスリムに  
 花万葉古城を守る龍頭  
 池をめぐればうららかな昼

御 明雅 水壺 杉亭 和弥 好敏 政志 麻子 良弥 和彦 文子 弘子 美津 紀子 良輔 智恵 照子 凡 執筆 哲

ことしは菅公生誕千五十年を記念しての藤祭に参加しての、とりわけ意義深い正式俳諧に宗匠の大役を仰せつかって、そぞろ身内の震える思いであった。

菅公といえは先頃歿った十三世片岡仁左衛門絶世の名品といわれる「道明寺」の佛が深く印象づけられている。松島屋を気取るつもりはないにしても、宗匠といえは、気品と貫禄が嘘にも欲しい役どころである。

ましてや今回は猫菘会のもの優しげだが、強い個性と知性に裏打ちされた男性諸兄総出動、顔見世舞台での照れっばなし、あがりっぱなしのお恥しい有様をど披露したことと悔いるばかりであった。

それにしても明雅先生の一步も戻らず、先へ先へと進む創造力にはまったく兜を脱いでしまふ。

かふたちてさかふる梅の若枝哉

との菅公の神の夢のお告げの句を発句としての「夢想披き俳諧の連歌二十韻」の花の句をつける、といわれるのはなんとしても重荷であった。道真公だの人丸だの神様の立句を受けて「花を持たせていただく」光榮は有りがたいことであっても、どう付けたら良いのか。さんざん迷った拳句、脱いだ兜を神前に供え直しての愚句でお茶をにごさせたいだいたいのもの、先生も意地が悪い。それにしても昨年十月宗匠本役の隆秀氏が体調を崩したための代役ということ、私にとつていささか気を楽にくれた。仁左衛門の代りを伴の孝夫が勤めたつもりなどと言っては御鬚負筋から文句が出るかもしれないね。まずははっとしているとこです。

藤送り 藤咲くや

白 藤

市野沢弘子 捌

藤咲くや正式俳諧二十韻  
 諸礼停止と歌ふ鶯  
 紙鷲尾をひるがへし遠山に  
 親子よく似て長き鼻筋  
 中国が好きでまた行く月の頃  
 柄の大きな竈馬ゐる  
 ぬくめ酒焼木杭に火がついて  
 産後の乳のはり来るを抱き  
 くらがりに冷房音のひびくのみ  
 虎が雨降る飯住の寺  
 あらはれて里を騒がす海坊主  
 核弾頭はこちら向きをり  
 新総理屁つびり腰は困ります  
 ブレンド米の鮨はいけるぞ  
 湾岸の夢の架橋寒の月  
 いそいそはじむ春の支度を  
 アメリカンショートヘアを去勢して  
 人生およそ実に凸凹  
 うぶすなの神は今年も花吹雪  
 耕す土に力漲る

太朗 明雅 しげと 則子 青宵 郎 雅 と 徒司 宵 郎 雅 と 則 則 郎 宵 則 郎 雅 と 徒司 宵 郎 雅 と

白藤に重なる藤の濃紫  
 亀の甲羅の乾く春昼  
 若布椀懐石膳へ差し出して  
 なにかと言へばすぐにメモ取る

山の宿月の涼しく語りつき  
 浴衣にかくす豊かなる胸

ファックスで送る恋文キスマーク  
 ホームレス猫やって来る頃

連立の首班指名にのりそこね  
 有髪のまま開く仏典

雪達磨宅急便で美幌より  
 サッカーを見る病室の子等

カラオケのラストはいつもデュエットに  
 そぞろ寒さに強く抱きしめ

鹿垣の鍵を確かむ酔の月  
 黄落の下思ふ来し方

再びの職は離島の定期船  
 みんなにこにこ記念写真を

花大樹大社づくりの古社  
 気流にのりて烏雲に入る

弘子 淑子 恵美子 徒司 照子 よしえ 照 惠 淑 照 同 淑 照 同 淑 照 同 淑 照 同 淑 照 同 淑 照 同



藤の揺れ

久保田庸子 捌

藤の風

倉本 路子 捌

水かげろふゆるりと藤の揺れあたり  
 画眉鳥とべる晴れ初めし空  
 春障子おはじき遊び節つけて  
 ミックスジュースぐいと飲み干す  
 Jリーグ負けた試合に月高く  
 送り火の中交す約束  
 道行きの影追ひすがる秋の蝶  
 国立劇場変る出し物  
 信州にはじめて宰相生るるや  
 ちよつとよれよれアルマーニ着る  
 ワンルームマンションかつと大西日  
 此の頃麦酒箱で安売り  
 奪はれしあとの唇ふるへつづ  
 逃げの早さは魔女であるかも  
 寒の月山に囲まる深き湖  
 何を夢見る陸封の魚  
 雨洩りのエアロフロート我慢して  
 貧しき民もなつかしき友  
 穏やかに花の下なる老夫婦  
 仔猫甘えて寄りかかりくる

庸子 撫で牛の鼻つやつやと藤の風  
 麻子 春深みゆく彌宜の杳音  
 達子 到来の浜飛魚を調理して  
 杏奈 重ねられたる染付の皿  
 和彦 藍浴衣三面鏡に月あまた  
 同 また逢ひたくてミッコたっぶり  
 奈 片言で極秘情報洩らす聞  
 達 すったもんだの続く政界  
 麻 右肩をあげてひとりで生きてゆく  
 彦 アルコホリック・ワーカホリック  
 達 麴町赤坂麻布六本木  
 奈 冬の苺の並ぶ店さき  
 麻 Vサインラガー喜びオーバーに  
 達 ルンバのリズム聞きつコーヒー  
 麻 寝待月待たせ待たされ忍ぶ恋  
 彦 泣く泣く別れ後の出代り  
 同 秋江の通学船にクレヨン画  
 雀がちょんちょんハチローの歌  
 塩の道小さき仏とおらが花  
 文鳥を手に余生のどらか

路子 志げ子  
 杉守 杉守  
 かりん かりん  
 守男 守男  
 淑代 淑代  
 同 同  
 路代 路代  
 人代 人代  
 亭代 亭代  
 志代 志代  
 男代 男代

藤浪に

桑原 美津 捌

藤の花

坂本 孝子 捌

藤浪に酔心地なり太鼓橋  
 音もなく飛ぶ蛇の行く方  
 春暖炉ドミノをせんと集ふらん  
 堅焼煎餅割ってほぼほる  
 夏場所の幟はためく月の下  
 衣を更へて胸のふくよか  
 スチュワーデス見合写真のうづ高く  
 挨拶されて名前ど忘れ  
 雪舟の佛蘭西銃置く望岳亭  
 旅の半ばに仰ぐ寒雁  
 一応はパンナコッタも食べて見る  
 政策協議いつ果つるやら  
 喝采の操り人形すぐ退場  
 ふれ合ふ度に夜来香しむ  
 織月の闇のささめきいつか止み  
 新酒そそげるベア・タンブラー  
 ホスピスのボランテニアするクリスチャン  
 次々浮かぶ顔のなつかし  
 瓜坊の檻にふり込む花吹雪  
 濃き薄きあり山笑ふ頃

美津 亀戸や店の飾りも藤の花  
 久美子 獨活を井桁に積める軒先  
 啓世 耕転機盆地の畑にあやつりて  
 凡 サッカーファン子供等はみな  
 同 留め石に雪うっすらと初月夜  
 久 鏡の前で選ぶ口紅  
 世 逢ひに来る乳房のあはひ十字揺れ  
 世 面会謝絶の札の斜めに  
 久 酒煙草控へ待つのは首相の座  
 世 ハングライダー鳶を追ひ越す  
 同 サングラスかけていつもと違ふ街  
 世 3+3が5にも7にも  
 久 兄の恋どんとおいらが引き受けた  
 奈 愛する故に泣いた道化師  
 同 月光を容れて古城の窓高く  
 世 あきつ湧き立つ山の巖より  
 久 鱈の丹母の味にして  
 凡 点字たどれば遠きサイレン  
 世 振り上げて花よめ組の纏持  
 奈 拾はれて行く路地の猫の仔

孝子 孝子  
 欣二 欣二  
 志乃 志乃  
 八千代 八千代  
 乃二 乃二  
 同 同  
 遊 遊  
 代 代  
 乃 乃  
 同 同  
 代 代  
 乃 乃  
 子 子  
 遊 遊  
 乃 乃  
 同 同  
 代 代  
 乃 乃  
 子 子

